

---

# 青天の軌跡

睦月健人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト  
<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

青天の軌跡

### 【Nコード】

N9027V

### 【作者名】

睦月健人

### 【あらすじ】

オペレーション・サンダーブレイクより数ヶ月前。オーガ小隊に課せられた任務『山岳騎馬民族を殲滅せよ』。そこでジニスキーは伝説と言われる『青麒麟』に出会い、過去の出来事を思い出す。

## はじめに

この小説は作者の妄想から出来上がりました、サッカーをしないイナズマイレブンの二次創作です。  
また、以下の注意点を含みます。

- ・ジニスキーをメインに据えてみた。
- ・オーガしか出ない。本当に。
- ・サッカーはしない。とことんしない。
- ・前線の話。時軸的にはオペレーション・サンダーブレイク発動より数ヶ月前。
- 経験を積むために駆り出される話。
- ・バトルあり。主に銃撃戦。
- ・敵は山岳騎馬民族。大陸の方から渡ってきたようだ。
- ・騎獣という動物登場。
- ・オーガ無双。
- ・流血、怪我、暴力表現あり。
- ・オリジナルキャラは出ない。モブのみ作りました。
- ・オーガ無双というかジニスキーが出張するというか。
- ・ジニスキーの出自捏造。

注意点に関して「全然構わないぜ!」という照美様は先にお進みください。

誰得俺得小説ですが楽しんでいただけると光栄です。

- - - - -

## 用語説明

ホウニイアオ

今回、オーガ小隊が殲滅すべき敵。

五十年ほど前に大陸から渡ってきた騎馬民族が山岳地帯に住み着いたもの。

近年近隣の街との領土問題が悪化。

反乱を企てる違反分子になってしまった。

ホウニイアオとは中国語で『渡り鳥』の意。

## 騎獣

主に山岳地帯とその近辺に生息する。

その種類は多岐に渡るものの、太古の昔から存在する希少な動物。

馬を素体とし、更に別の動物の特徴を併せ持つ。寧猛な気性で、肉食。

今回の殲滅任務の場所である山には超稀少騎獣『青麒麟』が生息。騎獣保護地になっている。

## 青麒麟

その名の通り、青白く輝く体毛を持つ騎獣。人に馴れることは滅多になく、過去には人に襲いかかり食い殺すことさえあったと言われる。

非常に足が強く、早いため、ほぼ一日中走ることが可能。跳躍力も高く、山岳地帯に好んで生息するのも頷ける。

雌をリーダーに、その子供達で構成される群れで活動する。雄は基

本的に一頭で行動する。

上顎から伸びた長い牙は縄張り争いのほか、捕食や巣穴の掘削、マ  
ーキングに用いられる。

また、美しく見事な牙目当ての密猟も多い。

## 1 ホウニイアオ

険しい山脈が連なる山岳地帯。

カッカツと軽やかな蹄の音が響いていた。

山岳地帯用に配備されている軍馬での行軍である。

「多分この先はもっと狭く険しくなってるはず。あまり急ぐと滑落する可能性もある」

「詳しいな、ジニスキー」

「この辺りは庭みたいなものだ」

「青麒麟は大丈夫か？」

先導しているジニスキーが軽く騎獣の首を叩いた。青白く輝く体毛が特徴の騎獣、青麒麟。

長い牙を有する口から咆哮がほとばしる。

「……大丈夫そうだな」

バダップが、その美しい銀髪を山岳地帯特有の風になびかせ、声を張り上げた。

「この一帯は我らではなく敵に分がある。注意して進行するぞ！」

「はっ！」

「隊長、この馬の飾りはどうにかなるもんじゃないんですかね。あとこの格好も」

サンダユウがうんざりしたようにそう言って手綱を握り直す。

確かに、カモフラージュのためとはいえ、馬をガラガラに飾りたて、ゴテゴテの刺繍が施された服を着ての行軍である。

「ジニスキー」

その辺りはどうなんだ、と。

バダップが赤い瞳をジニスキーの背中に向ける。

「撃たれたければ外していい。こうやって飾りをつけたり、服を着ていれば味方と思われて撃たれない。危険を減らすには仕方がない」

青麒麟が唸り、歩を止める。

「どうした」

「見て来ます。イエーガーはここに。皆を任せる」

イエーガーと呼ばれた騎獣が一つ頷き、山唯一の道にどっかりと座り込んだ。

「コルルルル……」

「やっぱ、軍部に配属された騎獣世話係の息子は違うな」

エスカバがライフルを背負い直し、後ろにいるミストレに同意を求めた。

「どんな道にもプロフェッショナルがいるってことだね。山岳民族特有の文化って、飾りも綺麗だし、刺繍も美しい。三十年前はいい関係だったと聞いたよ。敵じゃなかったら今も彼らと良好な関係を築けたはずなのにね」

「この任務が終わったらこの服やるよ、ミストレ」

「レア物になるかもしれないしね。汚れないといいなあ」

ミストレが呟いたのを最後に、辺りは静かになった。イエーガーが小さく、ため息を吐くように喉の奥で鳴いた。

それから三分ほど経って、ジンスキーがライフルを右手、数羽の雷鳥の首を左手に握って戻ってきた。

「敵じゃなかった。反乱分子じゃない平和的解決希望者が数人いただけ。危ないから逃がしてきて、ついでにイエーガーと俺らのメシ」

「やった、久々の肉」

「匂じゃないから脂少ないけどな」

ジンスキーは鞍袋からロープを取り出し、雷鳥をまとめて縛って鞍の後ろに積む。

「じゃあもう少し進むと洞窟があるから今日は其処で休もう。明日は夜も進んで、明後日には本格的に戦わなきゃならないな」

イエーガーに跨がって、ジンスキーが進み始めるのを見て、バダッ  
プ達が続く。

日は、もうすぐ暮れようとしていた。

洞窟。

そんなに広くはないが、全員が入って食事と休息を取るぐらいならば問題無さそうだ。

雷鳥ついでにジニスキーが取ってきた薪で火を起こし、明かりにしながら雷鳥の羽を雫<sup>しずく</sup>っていく。

「じゃあ水と薪取ってくる。イエーガー」  
「グオン」

ひらりとイエーガーの背に跨<sup>また</sup>がって、崖を降りていくジニスキー。それを横目で見送ったバダツプが口を開く。

「ジニスキーには、家族が亡<sup>な</sup>いそうだ」

「それって、天涯孤独<sup>てんやこどく</sup>ってこと？」

「いつか母親のようになるのだと、語っていた。騎獣と共に生き、騎獣と共に死ぬ。そんな生き方を望むと」

「寂しい話だね」

ミストレがぼそりと囁くように呟いて、ため息を吐いた。

息が当たって、焚き火が微かに揺れた。

騎獣『青麒麟』の蹄の裏には収納可能の無数の鉤<sup>かぎ</sup>が付いている。

崖を駆け上ったり、駆け下りたりする際、滑落を防止するためである。

イエーガーの角に掴まり、鞍にしっかりと尻を着けて座る。  
「よし」

ボンと首を叩くと勢い良く駆け下り始めた。土煙がもうもうと上がり、小石が舞う。

イエーガーは軍の騎獣ではない。

先日ジニスキーが乗っていた軍馬が足を滑らせて滑落してしまい、その時彼を助けたのがこの一帯に住む青麒麟の小さな群れのリーダー



ーであるイエーガーだった。

イエーガーは鞍を着けることも、人間も拒まないという騎獣らしからぬ性質を持っていた。

遠吠えで群れの仲間に知らせた後、馬が着けていた鞍を着けて、ジニスキーを背に乗せて小隊のいる地点まで戻ってくれたのだ。

てつきり夜が明けたらいなくなっているものと思っていたのだが、こうして今も一緒にいる。

「薪はどこ辺のがいいかな」

下まで降りたイエーガーがどんどん進んでいく。

牙で器用に枝を折り取ってはジニスキーに渡して、束ねさせる。

五分ほど続けた結果二十束ほどが作れたので、ジニスキーが止めるよう言うといエーガーは頭を一つ振って木くずを払った。

「水汲んで戻ろうか」

「オオン」

イエーガーが奥に向かって走り始めた。

群れのリーダーになる青麒麟は大抵年老いて子供を多く産んだ雌で、かなりの頭脳を持ち、人語を解することさえあるといわれるが逆に体力は衰える。

イエーガーにはそれがなく、リーダーにしてはかなり若い個体だと言える。

それでも引き締まった筋肉と高い頭脳、長く美しい牙を持つイエーガーは威厳あるリーダーとして十分にやっているのだろう。「ここか？」

「オオン」

大きな泉。

澄んだ水を大量に湛える泉。

月が照らすそこはとても美しい。

「よし、汲むか」

ジニスキーが水汲み用の容器に水を汲む横で、イエーガーがたらふく水を飲んでいる。馬や牛と同じで、水を大量に飲み、餌を食べさ

えすれば騎獣はよく働く。

ただ、水も餌も満足に与えられないにも関わらずイエーガーはよく働く。

やはり過酷な環境で育った騎獣はぬくぬく育てられる軍の騎獣より桁違いに頑強である。

「たつぷり飲んだか？」

「オオオン」

「まだか」

「オオン」

「違う？……ああ、これだな」

腰に着けているポーチから岩塩の塊を取り出し、差し出せばくわえて噛み砕き始める。

一応母の教えで、騎獣の世話の仕方は暗記している。

騎獣は岩塩が好物なのである。

水を大量に飲んだ後は特に、体内の体液濃度や浸透圧を調えるために大量に塩を摂取するのだ。

「美味しかったか？」

塩を食べ終わり、口の周りを舐め回すイエーガー。野生では岩塩などわずかにしか手に入らない。それに、子供の騎獣の方が体の調子を調えるために塩を大量に必要とする。親や群れのリーダーは子供を優先するのだ。人間よりも優れているのかもしれない。

子供を見捨てることもなく、殺すこともない。

ジンスキーはイエーガーの鞍に水を満載した容器を下げ、跨がって元来た道を走らせた。

夜中。岩塩で煮込んだ雷鳥はジンスキーの分以外綺麗に骨になっている。

ジンスキーの分はとつくに冷めてしまっている。食べる気にもなれず、イエーガーに向けて投げるとイエーガーは見事に口でキャッチ

して丸飲みした。

仲間達が食べた骨も、ボリボリ音を立ててイエーガーが食べてしまった。食べられた雷鳥も本望だろう。

「お前は幸せ者だな」

「え？」

「いい仲間達だ」

「……うん」

イエーガーが体を丸める。

脇腹を枕にジニスキーが横になる。

「本当、仲間がいる前では喋るなよな。びつくりしたよ、人語を喋れるなんて」

「喋れるさ。私は人間と友好的な関係を築くために生きてきた。かつての過ちをただ……た、正すために」

ちよつと噛んでしまったイエーガーが照れ臭そうに口を歪める。

「もう寝ろ。明日も早くから進むのだろう？」

「うん。ありがとう」

毛布代わりにイエーガーは自分の尾をジニスキーにかけた。目を閉じ、睡魔に身を任せるジニスキー。

「娘よ、私は人間と共に行く。戻らなかったその時は、強く生きよ」眠りに沈む前、最後にジニスキーが聞いたのはまるで遺言のようなイエーガーの呟きだった。

朝は、まだ遠かった。

## 2 リアンシ

何も変わらぬ朝が来た。

山固有の青みがかった霧が洞窟内にも入り込み、全員の体をしつとり濡らしていた。

まだ暗いのだが、ジンスキーがもぞもぞ動いて体を起こしたのに気付いたイエーガーが尾をどかして喉を鳴らした。

そつと撫でてやると気持ちよさそうに目を細める。霧によって付いた水滴を飛ばすためにイエーガーがぶるぶると首を振ったためチリンチリンと金属の飾りが鳴った。

一応、霧を用心して銃器や武器、濡れたら困るものは全て雑囊ざつうに入れているため心配ないが、問題は馬とイエーガーである。

朝の内はひどく冷え込むため体力を奪われる可能性が高い。

それに今日は明日の朝までの進軍である。

体力を削られてはいないか、ジンスキーがイエーガーの耳元で呟くようにして聞いた。答えは実に簡潔だった。

「皮肉にも装飾品で阻まれて濡れなかったな」

ただ鼻の穴が濡れてしまい、グスグス言わせているためボロ布で綺麗に拭き取ってやる。

「はくしゅん!!」

何とも情けない声がして、ブボーが起きた。バシツとゲボーの額を叩いて起こし、ザゴメルを二人で起こしにかかる。

「ブブブブ……」

「ゲゲゲゲ……」

「なんだあ、朝っぱらから」

ドスの利いた低い声に、ザゴメルの軍馬が目を覚ましていない。それにより洞窟内は徐々に騒がしくなり、ジンスキーとイエーガーは顔を見合わせてやれやれと言うように首を振った。

この山には多くの騎獣が棲息している。

地を駆ける者だけではなく、天を舞う者もいる。

その二者の代表格が『青麒麟』と『飛獅子』であった。

飛獅子は神話に出てくるワシと獅子が混ざった幻獣であるグリフィン（グリフォンとも呼ばれる）に酷似している。

要するに猛獣である。

そして今日の行軍ルートには、飛獅子の巣が集中しているのだ。文字通りの危険地帯。

「何で魔の巣窟みたいなところに踏み込まなきゃならないんだよ……」

「飛獅子っていったら軍部にもいない超稀少騎獣じゃないか。いいなあ、乗りたいなあ。地をのろのろ行くより空だよ空」

不満たらたらサンダユウと、あからさまにイエーガーへの当てこすりと取れる発言をするミストレ。

イエーガーは鼻息を荒くして、怒り狂っている。ぎらぎらした目でミストレを睨み、ふん、と鼻を鳴らした。

「いっちょ前に機嫌悪くしてんのか」

「あ」

ジニスキーが空を指差す。

そこには数頭の飛獅子が舞うように飛んでいた。どうやら、母親が子供に飛び方を教えているらしい。

「あれ欲しいな」

「食い殺されるぞ」

「子供かわいい。子供が欲しい」

確かに飛獅子の子供はかわいらしいのだが、大きくなったらムキムキだし大食らいだし、あまりいいことはない。

「母親に殺されるって」

「あつ」

「何だよエスバカ」

「バカじゃねえよ。あれ」

エスカバの指差す先にキーキー鳴き喚く飛獅子の子供が一頭。必死に崖にしがみつき、落ちないようにしている。

「飛ぶのを嫌がる子供はたくさんいるよ。いちいち気にしてたらきりがない」

「違う違う。あいつの翼、何か変じゃないか？折れ曲がつてるっていうか、障害があるっていうか」

「ん〜？」

ミストレがその大きな目を細めて、飛獅子の翼を見据える。なるほど、あの折れ曲がり方では飛ぶことなど出来ないだろう。

ガラツと、飛獅子がすがりついていた出っ張りが崩れて、イエーガ―の顔面に当たる。

まずいぞ。

そう言う代わりにイエーガーが動いた。

勢いよく走り出し、落ちそうになった子供を首で受け止めて着地する。飛獅子はきょとんとしている。

人間はおるか、他の騎獣を見たこともなかったのだろう。

イエーガーが山道に降ろしてやると、分からないなりに恩は感じているらしくパタパタと尾を振った。

「よしよし、ちよつとごめんね」

ジニスキーが飛獅子の翼を触り、確かめるように引っ張って広げる。飛獅子は構ってもらえるのが嬉しいらしく、ジニスキーの手をくちばしで甘噛みしている。

「こりゃあ先天的な障害だな。一生飛べないで終わる感じの……イタイイタイイタイイタイ」

「ちよつと抱かせてよ」

ミストレがジニスキーとイエーガーの顔面を押しつけて、飛獅子を抱き上げる。

生後一年も経たない内に体重は80キロを超す猛獣だが、見た限りこの飛獅子は産まれて二ヶ月といったところだ。  
だいたいミストレの半分程度の重さだろう。

「いいなあ、かわいいな……でもこういう自由なやつらを囲うような糞みたいな大人にはなりたくない」

飛獅子はミストレが気に入ったらしく、三つ編みをくわえて軽く引っ張って遊んでいる。

グオオオオ！！

刹那に聞こえた怒りの声。

親の飛獅子が怒りに猛って襲いかかってきたのだ。

「キイッ！」

怯える飛獅子をミストレが、被っていた布でくるんで強く抱き締める。

「イエーガー！！」

イエーガーの、棘が突き出した蹄が飛獅子の顔面を素早く何度も蹴りつけた。

騎獣は、人間が傷つけたり殺したりすると重罪に問われる。だが、騎獣同士ならば何も問題ない。

ガブリとイエーガーのくちばしが飛獅子の左目に食い付き、押し潰す。

「ギャオオオオ！！」

凄まじい悲鳴。

それと共に飛獅子が岩壁を転がり落ちていく。イエーガーは返り血を浴びて若干興奮しているが、大丈夫そうだ。「親を撃退しちゃった以上、やっぱり俺らが面倒見んのか……」

ミストレの腕の中でキーキー鳴いて甘えている飛獅子を見て、イエーガーがやれやれと言うような顔をした。

「つーわけで、ごめんなイエーガー。もう一回子育て頼むな」

そうジニスキーに言われて、イエーガーはがつくりとうなだれた。

その日の夜。

エスカバが一つあくびをした。

月が高く昇っても行軍は続いていた。

さすがに1日休まずには人馬共にきついものがある。先頭を行くイエーガーは余計に疲れているだろう。

ミストレは眠っている飛獅子の頭を撫でながら馬を進める。

こんな静かな行軍を引き裂いたのは、一発の銃声だった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9027v/>

---

青天の軌跡

2011年10月5日20時37分発行